



海禅寺新聞 第27号



吹く風の中に秋を感じられる季節となりました。境内の銀杏の葉も、徐々に色づき始めています。振り返ってみると今年も暑さ厳しい夏でした。かつては夏でも涼しさを感じられた本堂内も、近年の暑さにかかつては午後ともなるとすっきり蒸し暑くなり、御供えした生花は注意を怠るとすぐに傷んでしまう程でした。そんな暑さの中でマスクを着用するとすると、皆さんも大変な思いをされたことでしょうか。

このマスクは感染症予防に効果があるとは言うものの表情がわかりづらく、相手の気持ちを深く読み取る必要があるコミュニケーションの際には不都合を感じるという弊害もあります。また市中ではあちこちに人と人との間に透明のアクリル板が置かれ、ソーシャルディスタンスと称して、人との距離を十分にとることが推奨されています。加えて今や誰もが無症状の感染者であるかもしれないと言われるれば、益々他者と接点を持つことは慎重にならざるを得ないでしょう。地域の祭り、会合、宴会なども自粛が当たり前となりました。新型コロナウイルス感染症は、人と人との関係性を分断する力も持っているようです。しかしこのままでよいのでしょうか。翻って海禅寺のお隣、認定こども園芙蓉園(旧 芙蓉保育園)を見てみましょう。

ここでは0歳から6歳までの乳幼児が日々各家庭から通ってきては集団生活をし、遊び学んでいます。ある時期は行政の指示により、可能なご家庭に限って感染症対策として登園の自粛依頼をしたものの、基本的には休園することなく、これまで通りの開園を続けています。彼らを見ているとマスクの着用を嫌がる人がいたり、小さな年齢となれば口ではなくおでこにマスクが着いていたり、はたまた帽子の様に頭に着けている人もいます。園内を歩けば、マスクの落とし物を拾うこともあります。ソーシャルディスタンスなどと洒落たことを言ってみても理解はできませんので、人と人との間を開けましょうと声をかけたこともありました。それは子どもにとって無理なお願い。ほっておけば友達とくっついて愉快に笑い合い、楽しく遊んでいます。しかし、よくよく考えてみると、この年代の子どもの私たちの姿に人間の真理があるような気がしています。彼らは朝から晩まで友達と語り合い、笑い合い、時にケンカもしますが、複数の仲間と集いじゃれ合い、賑やかに生活しています。これは私たちの本能の一つではないでしょうか。もちろん一人であることを好む方はいらつしやるでしょうが、人生の全てにおいて孤独であることを求める方はないでしょう。「人」という漢字は人と人が支え合う姿を現していると言われていますが、二画で書かれるこの一字の二本線には、空間(ディスタンス)はありません。今の時期、直ちに感染症予防の全てを解除することは難しくとも、不安を煽るメディアの情報を受けていたず



らに恐怖を募らせすぎないように気をつけたいものです。そして間違っても罹患された方を誹謗中傷したり、定かでない噂話を広げたりすることなく、いざというときは「お互い様」と支え合える、あたたかな社会の一員でありたいものです。「人々の優しさはウイルスとの戦いの強い武器になる」とは萩生田光一文部科学相の言葉です。今、私たち人類は、新型コロナウイルス感染症という機会をもって、大自然からその真価を試されている時なのかもしれません。

生きる力 vol.102 送付

お馴染みの「生きる力 vol.102」をお届けします。今回の特集は『平穩への祈りと実践』です。自然災害や疫病の猛威に対して平穩な日々を願う、様々な場面で祈りを捧げている方々が多くおられることとします。本特集では仏教の祈りの内実について書かれています。ご一読いただくことで皆さんの祈りを更に深いものへ進める一助としていただけましたら幸いです。

秋彼岸会 中日法要のご案内

恒例の秋彼岸会法要を海禅寺本堂にてお勤めいたします。どうぞご家族おそろいでお出かけください。(申込不要)
日程：令和二年9月22日(火)
時間：受付 午前10時
法要 午前10時半

※毎回、有意義な懇親の場となっている法要終了後の茶話会ですが、今回も前回と同じく感染症に配慮して中止します。
※彼岸会法要の供養塔婆をご希望の方は、19日(土)夕刻までに電話またはファ

ックスで、寺にお申し込みください。
(供養塔婆料 一基 3000円)
※境内墓地をお持ちの方は、お寺においてならなくとも供養塔婆を墓前に手向けさせていただけます。ご希望の方はどうぞお申し出下さい。
電話：0268-22-2972
Fax：0268-26-1146



疫病護符について

檀信徒皆さまの日常が安寧であるための一助として、海禅寺独自の疫病護符を作成し、この夏お授けをいたしました。各ご家庭一体を差し上げましたが、更にご入り用の方はまだ若干護符がございますのでお申し出ください(二体目以降は一体五百円でお分けいたします)。

今回の護符に對しまして檀信徒の方々より御礼のお手紙をいただきました。ここに匿名にてご紹介をさせていただきます。
☆「この度はお心の籠もった護符をお送り頂きました。誠に有難く心から厚く御礼申し上げます。早速仏壇に御供えし、朝夕にお祈りさせて頂いてお力をいただいております。心が安まります。」
☆「コロナが流行っているこの時期にこのような御札をいただき、有難く頂戴致します。私も高齢になり、コロナにかかれば生命の保証はありません、このような御札があれば心強いです。」

☆「先日は薬師如来さまの護符をお授け戴いてありがとうございます。仏壇に安置致しました。連日の猛暑、コロナ禍等、年寄りには不安と孤独感にかられる日々ですが、護符を戴いてからは気持ちも落ち着きました。誠に有り難うございます。」

境内墓地工事が始まります

既にお知らせしておりますように、海禅寺境内墓地に『永代供養墓』を新設する計画を進めております。八月末に設計者と装飾を施してくださいるステンンドグラス作家の方と打ち合わせの場を持ち、いよいよ具体的な施工段階へ入ります。

つきましては今月より、まず墓地の整備作業が始まります。新設場所は墓地南側のスペースですが、重機等も入る作業となります。墓参においでの際は、怪我等に十分にお気を付けいただき、お参りください。尚、完成予定は現在のところ来春のお彼岸を目標としております。

聖天堂内の荘厳整備

現在の聖天堂は、篤信のお檀家様のご寄進により、平成二十一年秋に新築落慶をし、またその際にお堂内の十一面観音様はじめ各荘厳（飾りや仏具）は、大勢の檀信徒の皆さまのご寄附により整えさせていただきました。おかげさまで以来、毎年五月の第三日曜日には『聖天祭』を開催させていただいております。このお祭りは聖天様のご利益を通じて、多くの方々が海禅寺に集い、豊かな交流の機会となることを願って開催を続けております。今では毎年大勢の方々にご参拝ご参加をいただき、盛大な祭りとして成長をしております。そして聖天祭は来年十年目の節目を迎えます。また来年は海禅寺住職が喜寿を迎える年でもあります。そこでここまですべて健在に海禅寺山主を勤めてこられた事への感謝を込めて、住職が聖天堂内の荘厳をより整ったものとしたいと、その整備のために必要な全額を私財より寄進する誓願を立てました。具

体的には十一面観音様の厨子（ずし）と、お堂内の羅網（らもう）を、新たに京都仏具職人に特別注文しております。厨子とは、仏像を安置する扉付きの収納箱で、仏師松本明慶師 御作の十一面観音像に相応しい装飾を施しての作成を依頼しています。現在の十一面観音様は常時露見してありますが、この厨子に納めた後は聖天祭などのしかるべき時以外は御扉を閉めておき、お参りいただく際にご開帳したいと思えます。また羅網とは、教典には浄土や天界を飾る宝珠を連ねた網として記載される仏殿や仏像を飾るための荘厳具です。聖天堂内の各神仏をよりお讃え申し上げるために、お堂正面上部に施す計画です。

これらは来年の聖天祭にお参りの際はご覧いただけるよう諸々整備を進めております。



新装オープン祈願

過日、とある場所に新装オープンする美容室の開店にあたり、お祓いとご祈禱をして欲しいというご依頼をいただきました。密教にはこうしたご要望にお応えする法が伝わっておりますので、吉日を選びお店にお伺いをして、一座のお勤めをいたしました。

勤行の中で、在所の神々をはじめとする様々な存在に対して祈りの誠を捧げ、ご挨拶を申し上げます。また何より施主の方が新たな物事の節目に辿り、ご自分を取り巻く様々なご縁や諸々の力に対して真摯に感謝の思いを起し、謙虚な気持ちで門出の意思を固める一時としていただきました。このことはとても大切なことで、こうした意識なくしてはどんなことも成功

しないであろうと思えます。真言僧侶としては、祈願を懲らす事を通じてこうした思いを確固とするそのお手伝いをする事が、そのお役目の一つであると心得ております。

檀信徒の皆さまに置かれましても、店舗の新装開店等に限らず、何かお祓い・祈願が必要な事項、お困りの事がございましたらお気軽にご相談ください。それについても今回は美容室ということで、オープン後にお客としてこちらのお店にお伺いすることができないのが何とも残念なのであります。

副住職の気まぐれ法話

入峰修行



新型コロナウイルス感染症がまだまだ息を潜めていた今年の春、行者仲間と、明科・生坂の境にある岩洲山へ入峰修行に行ってきました。入峰（にゅうぶ）とは、山頂を極めることを目的に登山するのではなく、修行として山林に分け入り登拝する修験道の修行のことを指します。岩洲山の麓付近は、かつて煙草産業が大変に盛んで、それにより大いに財をなした地域でした。そしてその集落では岩洲山を中心とした修験道の文化が豊かに築かれていました。今回の目的はその修験道一族の末裔の方にお会いし、実際に山に入ってかつての祈りの痕跡を辿りながら勤行して歩こうというものでした。

折しも前日は大雨、そして当日も道中はほとんど雨が降りしきる中でしたが、空梅雨であった当時期、同志の「ようやく降ってきたこの雨の喜びを草木とともに分か

ち合おう」という言葉と共に、歩を進めて参りました。快適に整備された家屋に住み、便利な街場の生活をしているとついつい忘れてしまいましたが、今こうしている瞬間も私たちは大自然の中にいますし、よくよく考えてみれば、「大自然と私がいる」のではなく、実は「大自然の一部が私」なのです。謙虚な気持ちで自然と向き合えば、ふと見上げた空でさえも同じことを教えてくれます。



大自然を神仏そのものとして拝み、山に分け入りその叡智を組み上げること自然と人間とを繋ぎ続けてきた修験者とその文化。現代に即したアレンジが必要な部分もありますが、しかし普遍的な価値があるのことは間違いありません。ましてコロナ禍の今、私たちは改めて自分たちが大自然の一部なのだという謙虚さを取り戻し、あらゆる側面で個々に「生き直し」をする必要に迫られているのかもしれないね。